



「意味」が生まれるために

いきなり引用から。

＊

昔の子どもが漢籍を暗誦させられたのと、それほど違いません。五歳や六歳の子どもが「風蕭々として易水寒し 壯士ひとたび去りて復た還へらず」(☆1)とか、「人生意気感ず 功名誰かまた論ぜん」(☆2)とかいう詩句の「気分」がわかるはずがありません。ましてや「怒髪天を衝く」とか「断腸の思い」とか「臍を嘔む」とかいう表現を裏づける身体実感を知るはずがない。

まず他人の語が先行する。それから、語を「受肉」できるレベルまで自分自身の心身の熟成を待つ。言語の習得というのはそういう自然過程をたどるものです。

(内田樹『他者と死者』文春文庫、2011)

＊

先ずは問題。☆1・2は、日本の教養ある人士は当然知っているものとされる漢文の一節である。さて、出典は？

答え。☆1は、秦の始皇帝を暗殺しようとした刺客の荆軻(けいか)が旅立つ時に詠んだ詩句。「復た還へらず」だから、死を覚悟しているのである。司馬遷の『史記』に登場するし、教科書教材にもなっているので、この場面は2年生で勉強すると思う。

☆2は、『唐詩選』第一巻にある魏徴と言う人の長い詩「述懐」の一節。人は他人の意気を感じて努力するものであり、金銭や名誉欲のためにするのではないの意である。こちらは、古詩という形態のため、最近の教科書には採録されていない。

で、なんで引用したのかというと、第二段落である。「語」が先行するのであって、「意味」が先行するのではない、つまり、分かって暗記するのではなく、暗記したものの意味がある日突然分かるようになる、ということなのである。若い時に、訳が分からないままたくさん暗記しておく、と、それがある日結びついて、思いがけない広さをもった世界が広がってくるということなのである。

「言語の習得」となっているが、勉強とは基本的にそういう性質のものなのだろう。「意味」があるから勉強するのではない。気づいたら、勉強したことに「意味」が生まれていた…というのが正しい理路なのである。

＊

その、「意味」を生み出す重要なきっかけの一つに「読書」があると私は思う。幅広い読書が、今までバラバラだった知識を体系化するきっかけになるのだ。だから、私としては、ことあるごとに君たちに読書を勧めたいと思うのだが、日比谷の現状をみればそれが難しいこともよく分かる。だって「速単」、だって「サクシード」…だもんね。

というわけで、この通信では色々な本の一節を紹介するように努めているわけだ。ちょっとだけでも目を通しておくことと、全く目を通さないこととの間には、大きな違いがあることを身をもって知っているからである。

だから、「面白そうだな」と思うものがあったら、ぜひ、夏休みにでも実際の本を手にとってみてほしい。補習に出るよりも、ずっと有効な過ごし方かも知れないと私は思う。